

## 少年院を出院した少年に関する研究（その1）

矯正協会附属中央研究所 大川 力  
 長谷川宜志  
 瀨上 康幸\*  
 茂木善次郎  
 東京矯正管区 門本 泉\*\*

キーワード：再入少年，自尊感情，非行原因

### 1 はじめに

少年院における矯正教育は、その施設内での教育で完成するものではなく、少年院仮退院後の保護観察下での指導と一体となって、その目的が達成されるものと考えられている。したがって、少年院から出院させるのは、再非行のおそれが少なく、社会内処遇に移すことが相当とされた少年たちであり、実際大部分の少年は健全な社会人として再出発している。しかし、再び非行により少年院に入院してくる少年がいることもまた事実である。矯正統計年報によれば、平成10年中の新収容少年の中で、以前に少年院に収容された経験のある少年は、男子656名(13.5%)、女子39名(7.4%)であった。なお、この新収容者に対する比率は、約10年前の昭和63年には男子22.9%、女子13.7%であり、最近は減少の傾向が見られる。

以前から再入少年について、再入するに到った原因とともに、矯正教育の効果についていろいろ検討されてきているが、そうした研究を概観すると、次のようなことが指摘されている(鈴木, 1983; 岡部, 1983; 及川, 1989; 丸山, 1992; 魚住, 1992)。

- ① 再入少年は、前回入院時の成績が悪く、さまざまな手を尽くしたにもかかわらず、個々の問題が本質的に解決されないまま出院し、家庭に落ち着けず、就職しても短期間で離職し、不良交遊が復活して、再非行に走った。
- ② 少年自身の再非行原因についての認識は、社会が厳しかった、悪友の誘いを断れなかった、周囲の人が信じてくれなかった、見栄を張ってしまった、一度ぐらいなら大丈夫と思った、などである。
- ③ 少年院処遇に対する認識としては、対人関係、体育運動、職員との面接、読書、職業補導などが出院後の生活に役立った、と考えている。

これらの研究は、記録、質問紙、感想文、文章完成法検査などを用いているほか、少年の特徴や主観的認識について調査しているが、対象者はある特定の少年院に再入院したものに限られている。

そこで、本研究は対象者をより広い範囲に求め、再入院した少年が以前受けた矯正教育をどのように受けとめているかを調査しようとして計画した。もとより再び少年院に入院した時点での調査であるから、前回少年院に

\*現新潟少年鑑別所

\*\*現東京少年鑑別所

在院していたとき、あるいは、出院後社会生活を送っていた時とでは異なることは考えられる。しかし、少年院出院後社会生活を送っている時点で調査することは不可能であるので、あえて再入院した時点で、回顧的に前回入院した際に受けた矯正教育についての考え方を調査することとした。また、同じ少年について、少年院入院時と、出院直前の変化を分析することが望ましかったが、長期間を要することと、現場の職員の労力が多大であることから、そのような方法によることができなかった。そこで初めての入院者と再入院者との比較や、新入時と出院前といった調査時期による差を比較することで、再入院少年の矯正教育に対する主観的な受けとめ方を調査することとした。このような方法は完全なものとは言えないが、上記のような制約から、再入少年に対する少年院の処遇プログラムを考えるうえでの参考資料を得たいと考え計画したものである。

## 2 方法

### (1) 調査対象

今回の研究は、少年院に再入院した少年が以前受けた矯正教育をどのように考えているかを分析するとともに、入院時と出院時での矯正教育に対する考え方に変化があるかどうかを見ようとするものである。そのため対象者は医療少年院を除く全国の少年院49庁に在院している少年で、平成10年11月と12月に新入時教育と出院準備教育を受けた少年のうち調査が可能だった者とした。

### (2) 調査内容

職員用調査票 調査対象となった少年について、次の17項目についての記載を施設の職員に依頼した。ただし、⑬以降は少年院再入院者についての調査項目である。

- ①性別 ②調査日 ③生年月日  
④入院日 ⑤非行名 ⑥種別・分類級

- ⑦施設歴 ⑧教育過程 ⑨知能指数  
⑩M J P I 粗点 ⑪最終学歴  
⑫入院時保護者  
⑬前回少年院入院日と出院日  
⑭前回出院時の種別と分類級  
⑮前回入院時非行名  
⑯前回入院時懲戒回数  
⑰前回入院時受賞回数（内容を含む）

### 少年用調査票

次の6種類の質問から構成された質問紙により回答を求めた。

#### A 自尊感情尺度

Rosenberg, M. (1965)によるもので、「だいたいにおいて、私は自分に満足している」など自分の評価に関する内容の質問10項目で構成されている。回答は「そうだ」「まあそうだ」「ややちがう」「ちがう」の4つの中から1つを選ぶようになっている。この日本語訳は山本ら(1982)、星野(1970)によるもので、大川ら(1998)で用いたものと同じである。

#### B 入院の原因に関する質問

少年院に収容された原因についての自分の認識を問うもので、次の11項目から構成され、Aと同様4つの回答の中から1つを選ばせるものである。

- ① 勤めていた会社や友達が悪かったからだ  
② 能力が足りなかったからだ  
③ 運が悪かったからだ  
④ 世の中の仕組みをよく分かっていなかったからだ  
⑤ 長い間努力をしてこなかったからだ  
⑥ 気が緩んでいたからだ  
⑦ 育った家庭が悪かったからだ  
⑧ 周りの人がやさしくしてくれなかったからだ  
⑨ すぐに怒ったり、気分が変わりやすいからだ  
⑩ 社会が厳しいからだ  
⑪ 良い先生に出会えなかったからだ

C 少年院の収容目的に関する質問

「非行少年を少年院に入れるのはどうしてだと思いませんか」という、少年院の設置目的について次の8つの質問のそれぞれについて、「まったくそうおもう」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の5つの回答の中から1つを選ばせるものである。この項目は、刑罰論研究会の行った調査のうち、刑罰の目的に関する調査項目を利用したが、少年院用に一部表現を変えている（刑罰論研究会, 1984）。

- ① 悪いことをした分だけ、その少年を苦しめるため
- ② 非行少年を社会から切り離し、少年院にいる間、非行をさせないようにするため
- ③ 非行を起こしそうな少年に、非行をすればどんな目にあうのか見せしめとして示すため
- ④ 被害者との間に不公平がないようにするため
- ⑤ 悪いことをすればどんな目にあうか、その少年に分からせるため
- ⑥ 少年院に入れて、その少年を教育し直し、よくするため
- ⑦ 社会の人々が「非行は許さない」と考えていることを示すため
- ⑧ 非行をすると少年院に入れるよう法律で決まっているため

D 文章完成法検査

「私が前の少年院で学んだことは」など9つの刺激語に続けて、思いついた文章を書かせる検査である。

E 言語連想検査

「少年院」を刺激語とした言語連想で、反応数に制限はない。

F 少年院で受けた指導に関する認識

「先生と面接して、自分のことや将来のことを相談する」など49項目の少年院での教育

指導について、それを経験したかどうか、また、経験した場合「ためになった」から「ためにならなかった」まで5段階の回答の中から1つ選ばせた。

ただし、上記の6種類の質問のうちDとFは前回少年院に入院したときのことにに関する質問なので、初入少年に対しては実施していない。

なお、今回の報告では、上記の質問のうちC「少年院の収容目的に関する質問」までの調査結果を報告し、D「文章完成法検査」以下については、次年度に報告する予定である。

(3) 実施方法

原則として個室で実施し時間制限は設けなかった。調査は無記名であるが、調査に協力するかどうかは、自由意思によることとしたが、調査を拒否したものはなかった。

3 結果

有効な資料が得られたのは男子632名、女子124名の計756名であった。これら対象者は少年院入院経験の有無と、調査時の教育過程により、表1の4群に分けた。

表1 調査対象者の構成

		教育過程	
		新入教育期	出院準備教育期
入院	なし	新入・初入群	出院・初入群
経験	あり	新入・再入群	出院・再入群

なお、群名については以後表のように略記する。また、初入と再入を含めた新入教育期の少年を「新入群」、同様に出院準備期にある少年を「出院群」、また、少年院収容経験のない少年は教育過程に関わらず「初入群」、収容経験のある少年を「再入群」とする。

表2 調査対象者群別・年齢別人員

	群別\年齢	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	21歳	計	平均年齢
男	新入・初入群	17	39	53	48	32	28	3		220	16.6
	新入・再入群		2	15	27	30	41	1		116	17.8
	出院・初入群	1	16	26	41	55	40	13		192	17.6
	出院・再入群			1	12	23	31	31	6	104	17.7
	計	18	57	95	128	140	140	48	6	632	17.3
女	新入・初入群	7	11	14	12	8	7			59	16.4
	新入・再入群		1		5	1	2			9	17.3
	出院・初入群		4	8	11	7	10	8		48	17.7
	出院・再入群				5	2	1			8	17.5
	計	7	16	22	33	18	20	8	0	124	17.0

群別・年齢別人員は、表2のとおりである。男女とも新入・初入群が他の群に比して平均年齢が1年前後低いが、他の3群間では差はない。

なお、女子は再入少年が少なく、上の群に分けたときの人員は10人未満なので、以下群間の比較は男子だけについて行うこととする。

#### (1) 自尊感情尺度得点

自尊感情尺度は10の質問項目から構成されているが、大川ら(1998)に従い、回答に偏りの大きい1項目を除き、9項目の回答から得点を算出した。得点は自尊感情が高いと考えられる回答を4点とし、以下3, 2, 1の得点を与え、その合計を自尊感情得点とした。したがって最高得点は36点である。

ただし、この尺度で測定した自尊感情は自分でそうだと思っている主観的なものであり、この得点が高いことは、いわゆる自尊心が高い場合のほか、自信過剰だったり、自己顕示傾向が強いことを反映する場合も考えられることに注意する必要がある。

性別・年齢別の自尊感情得点を表3に示した。得点は年齢とともに高くなっているが、分散分析の結果では年齢による差は認められなかった。

次に性別・群別の平均得点を表4に示した。男子は再入・出院群の得点が最も高く、以下初入・出院群、初入・新入群、再入・新入群となっている。分散分析の結果、4群の自尊

表3 性別・年齢別自尊感情得点

	年齢	人員	得点	標準偏差
男	14・15歳	72	23.18	4.62
	16・17歳	221	23.26	4.86
	18・19歳	274	23.62	5.22
	20・21歳	53	23.83	5.40
	計	620	23.46	5.04
女	14・15歳	20	21.35	5.47
	16・17歳	54	21.80	5.07
	18・19歳	37	22.11	5.75
	20・21歳	8	22.88	3.27
	計	119	21.89	5.22

注 無回答のあった者は除外したので人員は表1とは一致しない

感情得点には、有意な差があり、再入・出院群が最も高く、再入・新入群が最も低かった。また、初入・新入群は再入・出院群よりも有意に低く、再入・新入群は初入・出院群よりも有意に低かった。さらに、これを初入一再入、新入期一出院期という2要因で見たところ、有意な差異が見られ、新入群よりも出院群の方が高い得点を示していたが( $F=4.72, p<.01$ )、その傾向は、特に再入の2群間(再入・新入群, 再入・出院群)で顕著であった。

以上の結果で見ると、出院群は入院群より自尊感情得点がかかなり高くなっているが、その傾向は初入群より再入群の方が著しい。すなわち、再入群の場合、入院当初は自尊心が大きく傷つけられていたが、出院期にはそれ

表4 性別・群別自尊感情得点

年齢		人員	得点	標準偏差
男	初入・新入群	217	23.17	4.80
	再入・新入群	114	22.00	5.04
	初入・出院群	188	24.02	5.02
	再入・出院群	101	24.69	5.17
子	初入群計	405	23.57	4.92
	再入群計	215	23.27	5.27
	新入群計	331	22.77	4.91
	出院群計	289	24.26	5.07
計		620	23.46	5.04
女	初入・入院群	56	21.96	4.96
	再入・入院群	9	21.44	7.40
	初入・出院群	46	22.28	5.03
	再入・出院群	8	19.63	5.78
子	初入群計	102	22.11	4.97
	再入群計	17	20.59	6.55
	新入群計	65	21.89	5.29
	出院群計	54	21.89	5.17
計		119	21.89	5.22

注 無回答のあった者は除外したので人員は表1とは一致しない

が回復し自信が付いてきたことを意味している。もっとも、本研究は1人1人の少年の入院期と出院期の変化を見たものではないので、多くの少年がこのような推移をたどると断定することはできないが、対象となった少年は

比較的短い期間に入院しており、そうした少年の資質に大きな変動はないと仮定すれば、上に述べた変化は矯正教育を通じての変化と考えても差し支えないと思われる。すなわち、自尊心を高めて、自分に肯定的な態度を取れるようになったという処遇効果が、再入少年の方がより顕著に現れていることになる。

ちなみに、少年鑑別所の入所少年を対象とした大川ら（1998）の研究では、少年鑑別所初入少年と再入少年では自尊感情得点に有意な差は認められなかったが、非行性の進度の指標となる鑑別判定と自尊感情得点の関係においては、少年院送致判定が出るような非行性が進んだ段階では、自尊感情が低くなることが示されている。

この結果を踏まえて考えられることは、より非行性が進んでいると考えられる少年院再入少年であっても、矯正教育は自尊心を高めるうえで効果があったことを意味している。

(2) 入院の原因に対する認識

この調査で用いた11の質問は、

- 外在的要因 — 内在的要因
- 安定的要因 — 不安定的要因
- 統制可能要因 — 統制困難要因

表5 「少年院に收容された原因」に関する質問の構造

質問内容	統制可能				統制困難			
	内的		外的		内的		外的	
	安定的	不安定的	安定的	不安定的	安定的	不安定的	安定的	不安定的
① 勤めていた会社や友達が悪かったから			○					
② 能力が足りなかったから					○			
③ 運が悪かったから								○
④ 世の中の仕組みをよく分かっていなかったから	○							
⑤ 長い間努力をしてこなかったから	○							
⑥ 気が緩んでいたからだ			○					
⑦ 育った家庭が悪かったから								○
⑧ 周りの人がやさしくしてくれなかったから				○				
⑨ すぐに怒ったり、気分が変わりやすいからだ						○		
⑩ 社会が厳しいから								○
⑪ 良い先生に出会えなかったから			○					

という3つの軸による3次元空間のいずれかに配置されることを想定している。その構造を表5として示した。

次に各質問についての回答を、「そうだ」を2点、「まあそうだ」を1点、「ややちがう」を-1点、「ちがう」を-2点として各群ごとの得点を算出した。その得点を群ごとに平均点を算出した結果が表6、表7である。

この表で平均得点が正の値であることは、それを非行原因として肯定的な傾向が強いことを、負である場合は否定的な傾向が強いことを示している。

この結果から見ると、男子の場合4群とも肯定しているのは、

「長い間努力をしてこなかったからだ」

「気が緩んでいたからだ」

の2項目であり、いずれも統制可能な内的要因に属する項目である。

また、「能力が足りなかったからだ」は新入・初入群だけが肯定的で、他の群は否定的であり、「すぐに怒ったり、気分が変わりやすいからだ」は、新入・初入群だけが否定的で、他の群は肯定的であった。この2つは統制困難な内的要因である。その他の7項目は、どの群も否定的であった。

次に、この評定平均値を4群間で比較したところ、11項目中5項目において、有意な差が見られた。

まず、「会社や友達」、「能力」、「世の中のしくみを知らなかった」ことを原因とするのは、初入群よりも再入群の方が評定平均が低く、また新入群よりも出院群の方が低かった。「努力」「気分が変わりやすい」は、新入群よりも出院群の方が高く、「気が緩んで」は、新入群よりも出院群の方が評定平均が低かった。

表6 少年院に入った理由についての原因帰属（男子）

安定性	統制可能性	項目	新入時教育期		出院準備教育期		F値と多重比較			
			初入	再入	初入	再入				
			A	B	C	D				
内的	安定的 可能	持続的努力	長い間、努力をしてこなかったからだ。	0.55	0.63	0.92	0.87	2.78 A<C	*	
		不可能	世の中のしくみをよく分かっていなかったからだ。	-0.16	-0.66	-0.64	-0.97	8.14 B<A, C<A, D<A	**	
		不可能	能力	自分の能力が足りなかったからだ。	0.09	-0.16	-0.66	-0.95	14.80 C<A, D<A, C<B, D<B	**
	不安定的 可能	一時的努力	気がゆるんでいたからだ。	1.29	1.23	0.70	0.94	9.05 C<A, D<A, C<B	**	
		不可能	気分	すぐに怒ったり、気分が変わりやすいからだ。	-0.14	0.12	0.57	0.51	8.15 B<C, A<C, A<D	**
		安定的 可能	教師の癖や努力	勤めていた会社や友達が悪かったからだ。	-0.73	-0.82	-0.93	-1.19	2.77 D<A, D<B	*
外的	不可能	課題の困難さ	良い先生に出会えなかったからだ。	-1.50	-1.63	-1.53	-1.44	0.87		
		社会的	自分の育った家庭が悪かったからだ。	-1.50	-1.41	-1.36	-1.23	1.46		
	不安定的 可能	予期せぬ他者からの援助	社会が厳しかったからだ。	-1.29	-1.29	-1.21	-1.29	0.25		
		不可能	運	周りの人が自分にやさしくしてくれなかったからだ。	-1.64	-1.62	-1.58	-1.77	1.49	
			運が悪かったからだ。	-1.15	-1.14	-1.17	-1.03	0.28		

注1 \*は5%、\*\*は1%水準でF値が有意であることを示す。

注2 分散分析の自由度は全て3

表7 少年院に入った理由についての原因帰属（女子）

安定性	統制可能性	項目	新入時教育期		出院準備教育期			
			初入	再入	初入	再入		
			A	B	C	D		
内 的	安定的 可能	持続的努力	長い間、努力をしてこなかったからだ。	0.59	1.44	0.88	0.88	
			世の中のしくみをよく分かっていなかったからだ。	-0.31	0.44	-0.06	-0.50	
		不可能	能力	自分の能力が足りなかったからだ。	-0.24	0.56	-0.10	-0.38
	不安定的 可能	一時的努力	気がゆるんでいたからだ。	0.88	1.33	1.15	1.13	
		不可能	気分	すぐに怒ったり、気分が変わりやすいからだ。	-0.39	0.33	0.50	0.63
	安定的 可能	教師の癖や努力	勤めていた会社や友達が悪かったからだ。	-0.33	-1.00	-0.65	-1.38	
外 的			良い先生に出会えなかったからだ。	-1.54	-1.78	-1.54	-2.00	
		不可能	課題の困難さ	自分の育った家庭が悪かったからだ。	-1.51	-1.33	-1.27	-1.13
				社会が厳しかったからだ。	-1.39	-0.89	-0.92	-1.38
	不安定的 可能	予期せぬ他者からの援助	周りの人が自分にやさしくしてくれなかったからだ。	-1.73	-1.89	-1.44	-1.50	
		不可能	運	運が悪かったからだ。	-1.10	-0.22	-0.50	-0.63

「運」「家庭」「回りの人がやさしくなかった」「社会が厳しい」「先生」は、初入群と再入群、新入群と出院群の間では差はなかった。この5項目は、いずれも外的な原因であり、自分が少年院に収容された原因を外的な要因にあると考えるのは、以前少年院に収容された経験や、処遇期間の経過と関係がなかった。

以上の結果から見ると、新入群と出院群、初入群と再入群の間で統計的に有意な差が見られた項目は、内的な要因である。そして、これらの中で1項目を除いては、出院群より新入群の方が得点が高かった。言い換えると、矯正教育を受けた結果、再入した原因を自分の内的な要因に帰属させる態度が薄れて行くと考えられる。これについて、先に述べた「自尊感情が新入期よりも出院期の方が高い」ということと考え合わせれば、矯正教育を通じて再入少年は自尊感情が強まり、自分を「そ

れなりに価値がある存在」と見られるようになり、少年院送致になった原因を全て自分のせいだとせず、より周囲の条件や、周囲と自分との関係をも含めて非行原因を考えるようになったことを意味していると考えられる。

今回の11項目の質問の中には、出院群が高い評定点を示したのは「長い間努力をしてこなかったからだ」という1項目であり、これは初入か再入かにかかわらず、出院群の得点が高かった。この項目は、自分自身に原因があるとするものであり、また、自分の努力によって変えることができるという統制可能なものである。しかも、それは自分が行動を起こさない限り、その原因はずっとあり続けるという安定的な要因である。このように自分のより深い内部に原因を認めるようになることと、自尊感情が高まることが、矯正教育の中では平行して進むとも考えられる。

次に、初入群と再入群の間で差が見られた

項目は、「能力不足」「世の中のしくみがよく分かっていない」「会社や友達」の3項目で、新入群でも出院群でも再入群の方が得点が低かった。この差は新入群、出院群のいずれでも統計的に有意な差があり、再入群は初入群に比べて、こうしたことに原因があるとは認めていないことになる。

逆に、初入群よりも再入群の方が高い評定点を示した項目は無かった。この結果は、再入群が今回の11項目以外に原因があると考えているとも考えられるが、再度の少年院送致は複数の原因が複雑にからみあった結果であると考えているのかもしれない。

なお、女子については、表7に平均得点だけを示した。

### (3) 少年院収容の目的に対する認識

「非行少年を少年院に入れるのはどうしてだと思いますか」という8項目の質問に対する回答を、男子について整理したものが表8である。回答は、「まったくそう思う」を2点、「ややそう思う」を1点、「どちらともいえない」を0点、「あまりそう思わない」

を-1点、「まったくそう思わない」を-2点として各群ごとの得点を算出した。その得点を群ごとに平均点を算出した結果が表8である。

どの群でも一番得点が高い、すなわち肯定の回答が一番多かったのは、「少年院に入れて、その少年を教育しなおし、よくするため」で、次いで「社会の人が非行は許さないと考えていることを示すため」「非行をすると少年院に入れるよう法律で決まっているため」であった。応報的な考え方に対しては、否定する回答の方が多いが、「悪いことをすればどんな目にあうのか、その少年に分からせるため」は、どの群もやや肯定する回答が多かった。

群間の差を見ると、「少年院に入れてその少年を教育し直し、よくするため」は、初入群よりも再入群の方が得点が低く、新入群よりも出院群の方が低い。また、「社会の人が非行は許さないと考えていることを示すため」では、初入群においては新入群よりも出

表8 非行少年を少年院に入れる理由（男子）

項 目	新入時教育期		出院準備教育期		F値と多重比較
	初入	再入	初入	再入	
	A	B	C	D	
1 悪いことをした分だけ、その非行少年を苦しめるため	-0.67	-0.74	-0.75	-0.62	0.39
2 非行少年を社会から切り離し、少年院にいる間、非行をさせないため。	-0.58	-0.39	-0.59	-0.26	2.08
3 非行を起こしそうな少年に、非行をすればどんな目にあうのか見せしめとして見せるため。	-0.69	-0.44	-0.77	-0.65	1.74
4 被害者との間に不公平がないようにするため。	-0.59	-0.60	-0.74	-0.50	1.05
5 悪いことをすればどんな目にあうのか、その少年に分からせるため。	0.39	0.17	0.25	0.56	1.99
6 少年院に入れて、その少年を教育し直し、よくするため。	1.91	1.69	1.64	1.57	10.41** B<A, C<A, D<A
7 社会の人が「非行は許さないと考えていることを示すため」。	0.56	0.28	0.26	0.47	3.22* B<A, C<A
8 非行をすると少年院に入れるように法律で決まっているため。	0.31	0.16	0.25	0.62	2.79* A<D, B<D, C<D

注1 \*は5%、\*\*は1%水準でF値が有意であることを示す。

注2 分散分析の自由度は全て3

院群の方が評定点が低く、再入群は新入群よりも出院群の方が高い。

「非行をすると少年院に入れることに法律で決まっているから」では、新入群よりも出院群の方が高いが、その傾向は再入群で顕著である。「非行少年を社会から切り離し、少年院にいる間非行をさせないため」では、初入群よりも再入群の方が高いが、統計的に有意とは言えなかった。

この調査は、少年自身のことではなく、一般論として質問したものであるが、前述のように、「少年院に入れてその少年を教育し直しよくするため」は、4群とも高い得点を示し、特に初入・新入群が高い。すなわち、少年院経験がなく、しかも入院して間がない少年は、少年院収容の意味について、「教育のため」と考える傾向が強いのに対し、出院に近くなった少年や少年院経験のある者は、こうした意識がやや薄くなっている。

また、初入群再入群とも、新入群よりも、出院群の方が得点が高いのは、「非行をすると少年院に入れることに法律で決まっているから」であった。これは先に述べたように、

出院期には新入群より自尊感情が高まる、すなわち自分に価値を認め、肯定的に受け入れられるようになってくるために、少年院に収容されることを自分の行為の結果として受け入れるという構えができていたためということも考えられる。

女子については、表9に平均得点だけを示したが、全体の傾向としては男子と大きな差はない。

#### 4 まとめ

自尊感情については、出院期の再入が最も高く、再入少年で新入群の者が最も低くなっている。これについては、矯正教育によって高まった結果だ、とは安易に言えないが、今後確認しておきたい結果である。

少年院に収容された原因についての認識では、再入少年を積極的に特徴づける項目はなかった。ただ、矯正教育を受けた結果、再入した原因を自分の内的な要因に帰属させる態度が薄れて行くこと、言い換えれば、少年院送致になった原因を全て自分のせいだとせず、

表9 非行少年を少年院に入れる理由（女子）

項 目	新入時教育期		出院準備教育期	
	初入	再入	初入	再入
	A	B	C	D
1 悪いことをした分だけ、その非行少年を苦しめるため	-0.76	-0.56	-0.58	-0.50
2 非行少年を社会から切り離し、少年院にいる間、非行をさせないため。	-0.46	0.56	-0.10	0.13
3 非行を起こしそうな少年に、非行をすればどんな目にあうのか見せしめとして見せるため。	-0.71	-1.11	-0.23	-0.63
4 被害者との間に不公平がないようにするため。	-0.31	-0.33	-0.19	0.13
5 悪いことをすればどんな目にあうのか、その少年に分からせるため。	0.41	0.00	0.40	1.00
6 少年院に入れて、その少年を教育し直し、よくするため。	1.73	1.67	1.73	1.88
7 社会の人が「非行は許さない」と考えていることを示すため。	0.15	0.00	0.19	0.75
8 非行をすると少年院に入れるように法律で決まっているため。	0.20	0.89	0.58	0.75

より周囲の条件や、周囲と自分との関係をも含めて非行原因を考えるようになったことを意味しているとも考えられる。

一方、非行少年を少年院へ収容する目的についての回答では、再入少年は、「教育し直し、よくするため」という認識を示しながら、その一方で、「法律で決まっているから」と「社会から切り離して非行をさせない」という単なる社会防衛の意味しか持っていないという認識もあることが示されている。

この種の調査では、とかく回答がいわゆる「建前」に終始し、「本音」が出ないことはしばしば見られるが、この調査においても、少年院への収容目的について、建前を取る傾向が強いが、一方、社会防衛的な傾向の回答への肯定が、再入少年の方に見られることは、本音も一部には出ていることを示しているのかもしれない。

## 5 おわりに

今回の報告は、自尊感情や少年院に送致された理由についての認識、少年院の収容目的に関する認識について検討した。しかし、今回の報告では、初入一再入、新入期一出院期という二つの軸で分析し、年齢、性別、処遇課程の違いについては触れていない。また、女子については十分な数の対象者が得られなかったことから、統計的な検討まではできなかった。これらは今後の課題として残ることになる。

次回は、調査の後半部分について報告する予定である。

### 参考文献

- 刑罰論研究会 1984 現代日本の刑罰論に関する調査研究 法律時報 56, (10), 54-65  
丸山裕二・大上康史・黒田修・小嶋次郎・西井一久 1992 再入少年の効果的指導法矯正教育研究 37, 48-49

- 及川洋之・板垣嗣廣・佐久間邦博・平澤孝志・千田淳二 1989 再入少年の特質と処遇上の留意点 矯正教育研究 34, 50-58  
大川力・淵上康幸・門本泉 1998 非行少年の自己意識に関する研究(その1) 中央研究所紀要, 8, 63-78.  
岡部宣夫 1983 少年の処遇の受け止め方について 四国矯正 37, 73-78  
Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Press  
鈴木康行・品田信生・藤沢充・高橋渉・小山義広・木田俊彦・熊谷豊司 1983 再入少年の特性と処遇の効果について 矯正教育研究 28, 100-106  
魚住絹代・渡辺玲子 1992 再入を防ぐための効果的処遇のあり方について 矯正教育研究 37, 50-59